

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

かしわ ばら ぶん た ろう
第15回 柏原文太郎

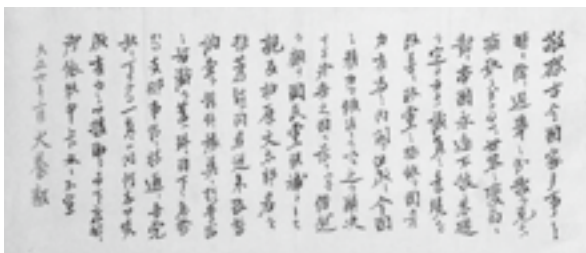
小学生ながら学術演説会で演説

柏原文太郎は、明治2(1869)年1月18日、埴生郡寺台村(現在の寺台)に柏原七兵衛の子として生まれた。幼少の頃から和漢や剣道、弓術を学ぶなど、向上心の高い少年であった。

明治15年3月、成田山新勝寺の客殿で行われた学術演説会に参加し、小学生ながら聴衆600人の前で雄弁をふるった。同18年に成田小学校を卒業し上京。駒場農学校(現在の東京大学農学部)に入学したが、政治家を志し、同22年、大隈重信が創立した東京専門学校(現在の早稲田大学)に転学した。同26年、英語政治科を優等で卒業した際には、その成績が認められ大隈賞を授与された。同28年、朝鮮政府農商工部大臣の招きにより朝鮮に渡り、実芸講習学校などの創設に尽力した。

帰国後の明治29年2月、母校である東京専門学校の講師兼舎監となり、支那研究会を組織して学生たちと共に東亜に関する研究を始めた。この頃、大隈重信、犬養毅、高田早苗らの紹介で東亜問題に詳しい近衛篤磨このえあつまるに出会い、同31年11月には、彼らと共に東亜同文会を結成した。

翌年、同会の幹事として日中関係の良好化を図る人材育成機関である同文書院を、近衛篤磨らと中国の南京に設立。その後



上/犬養毅の推薦文(『図説 成田の歴史』より)

下/柏原文太郎の墓がある永興寺(場所:寺台)



明治2年~昭和11年(1869~1936)

埴生郡寺台村(現在の寺台)に生まれる。上海に東亜同文書院を開設し、日中両国の子弟の教育にあたった。衆議院議員を4期務め、日中関係を中心とする経済問題の解決などに活躍した。また、目白中学校(現在の中央大学付属高校)を設立するなど、学校経営にも手腕を発揮した。



上海に移り、東亜同文書院を開設した。以後30年の長きにわたり中国関係の諸問題の解決に取り組んだ。

明治35年3月、犬養夫婦の媒酌により、後に文太郎の政治生活を支える大きな力となる田辺安喜子と結婚した。

衆議院議員として活動

明治42年、東京府豊多摩郡落合村(現在の東京都新宿区下落合)の近衛篤磨の屋敷内に細川護成もりしげと共に目白中学校(現在の中央大学付属高校)を設立し、学校経営にも手腕を発揮した。

大正元(1912)年5月、衆議院議員に国民党所属で千葉県から立候補し当選した。その後、4期10年の間、対中国問題を中心に、経済諸問題の解決に向けて活躍した。

国会活動の傍ら、同9年9月、東亜同文会の命を受け、妻と共に中国に渡り、天津、漢口において学校開設に従事した。同11年に帰国したが、過労のために倒れてしまう。

しばらくの休養の日々を送った後、目白中学校の校長に就任し、運営に携わった。しかし、大正14年10月に病に侵され、一切の職を辞して成田に戻り余生を送った。

昭和11(1936)年8月、68歳で生涯を閉じた。寺台の永興寺ようこうじの墓地に眠る。

参考:『成田市史研究』14号「柏原文太郎のこども」(大野政治)、
『成田史談』19号「柏原文太郎先生略年譜」(大野政治)

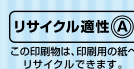
編集後記

9月も半ばになり、スポーツイベントなどの取材で外に出掛けることが多い日々。秋といえば涼しいイメージですが、まだまだ暑く、取材を終えると大粒の汗をかいています。皆さんはいつからが秋だと思いますか。調べてみると、暦の上では8月上旬の立秋を過ぎてから、二十四節気では9月下旬の秋分からとされています。どちらにしても、今年は涼しいイメージの秋とは言えなさそうです。早く過ぎやすくなっしてほしいですね。

平成30年9月15日号 No.1371

成田市ホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。